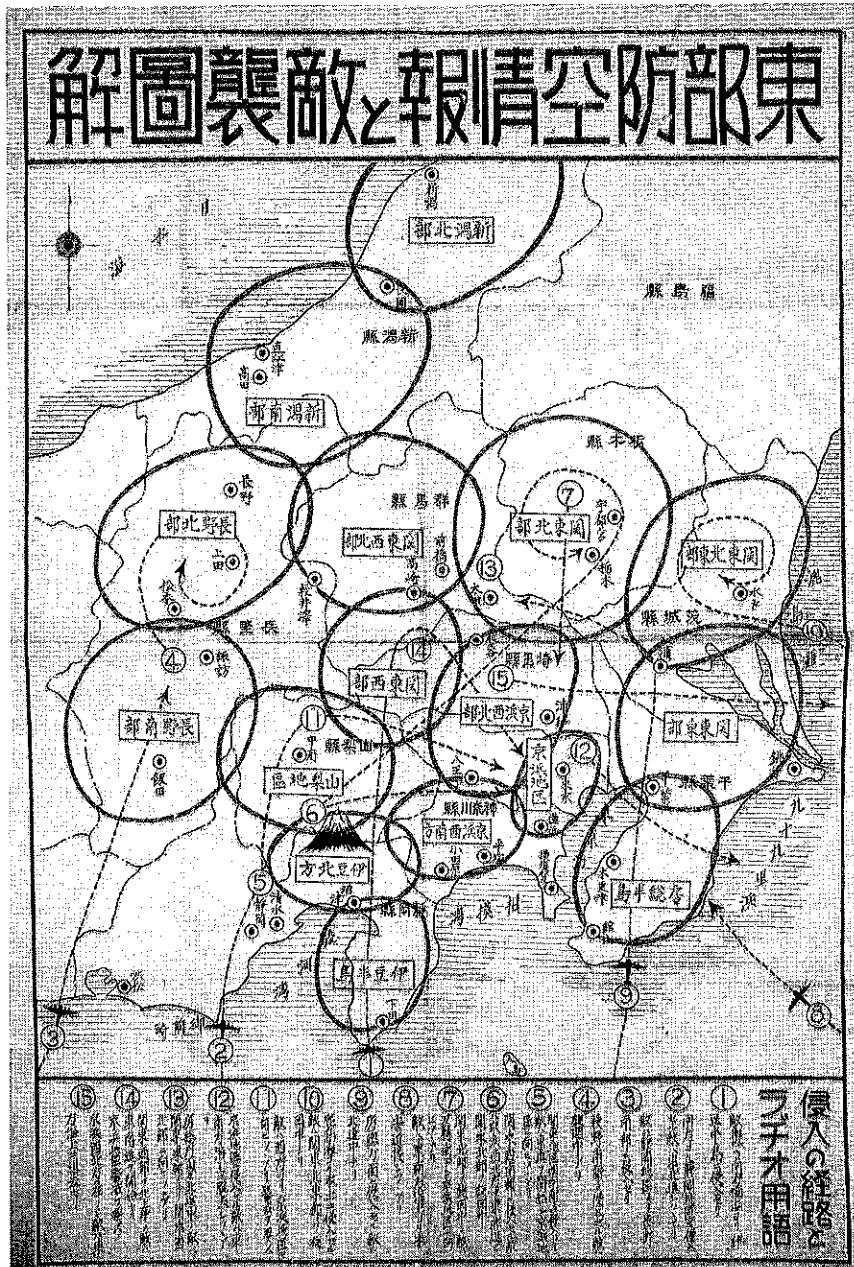


もくじ 空襲の情報を伝える 1P 小台延命寺と幻の復旧願書 2P
鹿沼での子どもの生活⑥ 3P



東部防空情報と敵襲図解 米軍機の飛来経路を示した貼紙。
各家庭に配布された。足立区立郷土博物館蔵

空襲の情報を伝える 防空情報の図解資料

足立史談

第562号

2014年12月15日

足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL03-3620-9393
FAX03-5697-6562

〈25-308〉

■ラジオ放送で知る 太平洋戦争の
末期、昭和19（一九四四）年からア
メリカ軍の空襲が激しくなりました。
東京では「東部軍管区情報」がラジ
オからながれ、警戒警報や空襲警報
とともに各家庭では敵機接近を知り
ました。

海軍軍人で小説家だった海野十三
(明治30・一八九七年～昭和24年・
一九四九年)は、昭和19年11月24日
のこととして東部軍管区情報につい
て次のように紹介しています。

（海野十三「敗戦日記」）
敵の編隊は伊豆半島方面より侵
入、なお後続部隊ありといふ東部
軍管区情報は、今日の空襲が本格
的であることを都民に知らせた。
「東部軍管区情報」を都民が非常
に期待するようになつたのは、
この日からだといつていい。
この日は爆撃機B29、一一一機によ
る東京への戦略爆撃の初日で翌昭和
20年8月の終戦まで9ヶ月間にわた
る空襲下のくらしが始まりました。
■貼紙とラジオ 上に掲げた「東部
防空情報と敵襲図解」は各家庭に配

学童疎開70年 特別展

▼時間 午前9時～午後5時

▼会場 足立区役所庁舎アトリウム

1／13(火)～17(土)

郷土博物館の協働グループ「足
立の学童疎開を語る会」では、昭
和19年から始まつた学童集団疎開
から70年目の節目を迎え、区役所
アトリウムで資料点を開催します。
疎開した全26の国民学校（小学校）
の情報や各種資料を展示する疎開
体験者の展覧会です。ぜひご観覧
ください。

▼お問先 郷土博物館
(電話3620-9393)

布された貼紙です。家族の集まる部屋のラジオの近くに貼られました。

警戒警報や空襲警報とともに、当時の暮らしの中で、ラジオ放送と貼紙は、空襲がせまっていることを知るための、重要な伝達手段でした。図には①から⑯までの区分と爆撃機および爆撃機集団の飛行経路が示されています。区分では足立区を含めた東京と横浜周辺は⑫「京浜地区」とされました。

なお陸軍の「東部軍管区」が成立したのは昭和20年2月からで、前は「東部軍」であり「東部軍情報」といいました。

足立区の学童たちの集団疎開がありました。とくに長野県北部は、足立区の学童たちの集団疎開先でした。国民学校児童の3年生から6年生、約七〇〇名が家族と別れ、疎開先の長野県で生活しました。

その長野県でも終戦直前の昭和20年8月13日、長野市が空母艦載機によるロケット弾や機銃掃射による空襲をうけ死者47人を出し施設も被害をうけました。

当時の疎開児童たちは、いま高齢化し八〇代になっています。皆さん

は「足立の学童疎開を語る会」を設立し来月展覧会を開催します(1頁下段参照)。ぜひご観覧ください。

(郷土博物館)

足立区の廃寺余話 第2回

小台延命寺と幻の復旧願書

柴田 英治

明治初期に足立区内で廃寺となつた寺々のひとつに、旧小台村の延命寺がある。江戸時代の延命寺は六阿弥陀二番として多くの参詣者で賑わう名所(『江戸名所図会』)で、將軍御放鷹における御膳所としての由緒を持つ寺院でもあります(『新編武藏風土記』)。その境内地は荒川水除堤を挟んで江北氷川神社(江北二・四三)の西側にあつた。

明治維新下で仏教を取り巻く環境は激変する。明治七年(一八七四)年五月延命寺は、無壇無住(葬祭檀家がなく住職空席の状態)が続き存続の目途が立たないことを理由に東京都へ合併願書を提出し、本寺恵明寺(江北二・四)への合寺が許された。合併の背景として「無壇無住寺院廃止令(明治五年太政官布告第三三四号)」の公布により、總本寺本山を除く全ての無壇無住寺院を廃止する政府方針があつた。また「社寺領上知令

による社寺領・社寺地の解体整理も、地租改正事業の進展によつて加速していました。明治七年当時の足立区域では延命寺など一一ヶ寺もの寺院合併・廃止(後日再興分を含む)が決まり、寺院整理のピークを迎えていた。

ところが一転して翌明治八年(一八七五)一〇月、小台村から東京府に延命寺復旧願書が提出された(次頁上段参照)。願書は復旧の理由として、無壇無住寺院廃止令への誤解

があつたことや寺院存続の目途が立つことを挙げている。このとき近隣本木村からも、前年本寺吉祥院(本木西町一七)へ合併済の瑞應寺(扇一・五)復旧願がほぼ同様の趣旨で出願された。これらの対応について東京府から指示を請われた教部省(当時の宗教統括官庁)は、翌一月両寺の運命を分ける判断を下した。教部省は瑞應寺の復旧を認める一方、延命寺については「無壇」を

寺院名	宗派	旧所在地	出願年月 (*2)	可否	主な却下理由
修成院	日蓮宗	荏原郡南品川宿	M0708	○	—
東源院	臨済宗	豊島郡金杉村	M0710	○	—
西光院	真言宗	足立郡千住宿北組	M0710	○	—
延命寺	真言宗	足立郡小台村	M0810	○	無壇
瑞應寺	真言宗	足立郡小木村	M0810	○	—
正覚院	真言宗	豊島郡中新井村	M0811	○	—
自性院	真言宗	豊島郡神谷村	M0902	○	—
東光院	旧当山派修験	豊島郡浅草福富町	M0902	×	寺院地跡なし
大眼院	浄土宗	豊島郡浅草神吉町	M0904	○	—
満藏院	真言宗	豊島郡袋村	M1912	○	—
高徳寺	真言宗	豊島郡下練馬村	M1001	×	少壇
林松院	浄土宗	豊島郡芝公園	M1001	×	公園地転用済
専福寺	真言宗	豊島郡神谷村	M1002	○	—
法受寺	浄土宗	豊島郡下尾久村	M1003	×	少壇
仙光院	真言宗	豊島郡三河島村	M1003	×	少壇
香林庵	浄土宗	豊島郡下板橋宿	M1005	×	附属堂舎扱い
觀明寺	真言宗	豊島郡下板橋宿	M1011	○	—

図① 東京府下の寺院再興・復旧願書一覧(明治7~10年)

寺院名	宗派	旧所在地	出願年月 (*2)	可否	主な却下理由
修成院	日蓮宗	荏原郡南品川宿	M0708	○	—
東源院	臨済宗	豊島郡金杉村	M0710	○	—
西光院	真言宗	足立郡千住宿北組	M0710	○	—
延命寺	真言宗	足立郡小台村	M0810	○	無壇
瑞應寺	真言宗	足立郡小木村	M0810	○	—
正覚院	真言宗	豊島郡中新井村	M0811	○	—
自性院	真言宗	豊島郡神谷村	M0902	○	—
東光院	旧当山派修験	豊島郡浅草福富町	M0902	×	寺院地跡なし
大眼院	浄土宗	豊島郡浅草神吉町	M0904	○	—
満藏院	真言宗	豊島郡袋村	M1912	○	—
高徳寺	真言宗	豊島郡下練馬村	M1001	×	少壇
林松院	浄土宗	豊島郡芝公園	M1001	×	公園地転用済
専福寺	真言宗	豊島郡神谷村	M1002	○	—
法受寺	浄土宗	豊島郡下尾久村	M1003	×	少壇
仙光院	真言宗	豊島郡三河島村	M1003	×	少壇
香林庵	浄土宗	豊島郡下板橋宿	M1005	×	附属堂舎扱い
觀明寺	真言宗	豊島郡下板橋宿	M1011	○	—

*1: データは『東京府文書』、『東京府史料』に基づく。

*2: M0708 は明治7年8月の略(以下同)。

理由に復旧不許可としたのだ。両寺の明暗を分けたのは葬祭檀家の有無だった。なぜ「無壇」の延命寺だけが復旧を許されなかつたのだろうか?

近世日本の国教的地位を占めた仏教の両翼は、「葬祭」と「祈祷」だった。徳川将軍家には葬祭を司る菩提寺(増上寺他)と、祈祷を司る祈祷寺(護持院他)があつた。皇室(菩提寺・泉涌寺他)や大名家は言うに及ばず、各地の村々にも菩提寺と祈祷寺の並立がしばしばみられた。村の祈祷寺は鎮守や仏堂を管理し、村中安全などの祈祷を担つた。その中には葬祭に関与せず葬祭檀家を持たない寺も多かつた。

明治8(1875)年10月 延命寺復旧願書
東京都公文書館蔵

阿弥陀堂別当の延命寺も近世には一種の祈祷寺として、仏堂管理や寺附耕地の耕作収入などを中心に運営されていたと考えられる。

祭政一致を掲げる明治維新により国教的地位は仏教から神道へと劇的な交代を遂げ、仏教による国家鎮護などの「祈祷」は神道による「祭祀」に取つて代わられた。①神道の国教的地位の確立、②合理主義的な近代国家への転換、③「祈祷」の民衆に及ぼす心理的な影響力排除などのため、維新政府には「祈祷」全般に大きな制限を加え、仏教を「葬祭」へと封じ込める意図があつた。だから、政府として葬祭檀家のいない「無壇」寺院の存続を安易に認めるわけにはいかなかつた。山岳修行と祈祷を活動の中心とする修驗道の廃止令(明治五年太政官布告第二七三号)は、明治政府の「祈祷」に対する断固たる姿勢を示した一例である。延命寺の復旧不許可以後も、東京府下では薬師信仰の真言宗高徳寺(下練馬村)や不動信仰の同宗仙光院(三河島村)再興・復旧願(ともに明治10年出願)が、葬祭檀家の少ないことを理由に相次いで却下された(前頁図①参照)。

「無壇」の祈祷寺だった延命寺の復旧願が幻に終わつたのは、近代日本佛教が「祈祷」という片翼を失う過程での、いわば必然の結末だつたのである。



鹿浜での子どもの生活 6

小川 誠一郎

■釣り遊び 人家の近くを流れる島掘りは本来の役割が果たせるよう、淀みない流れが常に保たれ水草などが繁茂する隙がない。一方、岸辺の泥壁に自由に巣穴が掘れるエビガニは大いに繁殖して、釣り糸を垂れるとすぐ掛かつてくる(※1)。お目当てのフナ、クチボソ、タナゴなどはいつこう姿を見せない。淡水魚が好む水草の繁る淀みは少なかつた。エビガニはもうたくさん!とあきらめ屋敷内の洗い場池へ釣り場を移すと、小さなフナやドジョウが良く釣れた。餌は小さいミニズ、発酵熱でいつも

廃寺ファイル② 延命寺

山号院号：甘露山応身院

宗派：新義真言宗

合寺年：明治7年(1874)11月
(恵明寺に合寺)

本寺/寺格：恵明寺/末寺

境内地：小台村字大門42

本尊：阿弥陀如来(江戸六阿弥陀二番)

○故跡開ですこした北鹿浜町の想い出(24)

【主要参考文献】『太政類典』・『東京府史料』(国立公文書館所蔵) / 梅田義彦『改訂増補併興廢・社格改称・紛失類焼』(東京府文書) 東京都公文書館所蔵) / 梅田義彦『改訂増補日本宗教制度史・近代篇』・大竹秀男『近代的土地位の形成・明治初期における社寺地処分の観察を通じて』(高橋幸八郎編『日本近代化の研究 上』) / 伊達光美『日本宗教制度史料類聚考』・圭室諦成監修『日本仏敎史Ⅲ・近世・近代篇』 / 林亮勝『菩提寺と祈祷寺』(牧尾良海博士喜寿記念論集刊行会編『牧尾良海博士喜寿記念儒佛道三教思想論叢』) / 原田敏明『宗教神祭』・宮家準『山伏・その行動と組織』・安丸良夫『神々の明治維新』 / 拙稿『明治期史料から探る足立区内の廢寺跡について』(足立史談)五三七)

温かくなつてゐる生ゴミ捨て場の山から採集できた。ドジョウはすぐ掛かるがぬるぬるして針をとるのに一苦労。フナは鱗を光らせ上がってくるので楽しくなる。でもガラスの金魚鉢や水槽がないから、桶やバケツに入れ、真上から青黒い背中を覗いて満足するほかない。で、顔の見えない小魚達を飼育する気持ちになれないのだ。

■エビガニ釣り 子供達はやけになつてエビガニ釣りに精を出す。田んぼを荒らすので大人達は歓迎だ。蛙をつかまえて皮をはぎ、足に縄を結びつけ堀へ放り込む。すぐさまエビガニが餌の蛙につかまつて上がってくる。在来種とアメリカ産の渡来種が混在していたはずだが、ハサミの大さきでオスとメスを区別する程度、違いは教わらなかつた。大きなハサミを振り上げ、向かって来る赤くていかついのと、体のわりにハサミが小さく、おとなしい青緑色のもいる！それに殻が抜け変つたばかりのや、オスとメスの姿の違いなどがごっちゃになつて良く分からなくなつた。活発で居丈高なのが良くなつた。田の畦などにはおとなしいのが多かつた。釣り上げたエビガニの処分に困り、最後は隠れてそつと鶏小屋に投げ入れた。鶏たちは大騒ぎして取り合いでしまう。卵の黄身が赤味を増すの

だ！エビガニの殻の赤い色素成分が鶏の体の中で脂肪分に結びついて黄身へ集まるらしい。消化された餌の成分が体の中でたどる様子を目撃したりできる、栄養学の生体実験をしていたことになる。

戦後の食糧難の中、近隣の街中からエビガニ釣りにやつて来る、子供連れの家族を良く見かけた。エビガニ食べんの？と驚き顔で迎えながら、スルメイカを裂いた餌を見ては、力エルの方がぜんぜん良いんだよ！と、すっかり田舎の子然とした得意顔で力エル取りを手伝つた。自分が疎開の身であることもとうに忘れ、面映ゆい格好良さを感じていた。

水をかぶった水田 もつとも水が深いときはあぜ道まで水没した

■ナマズとり 鹿浜では大きな台風に遭遇しないですんだ。中型らしいのが米た時は、荒川上流の堤防が決壊し、関東平野を流れ下る洪水原が鹿浜一帯を覆い、刻々と水位を増して床下までとどいたことがある。(※2) 道が水没し、濁水の原が見渡す限り広がっていた。地面が見えないので深みにはまる危険があり、子供は水が引くまで外出禁止だ。島堀の川筋に沿う大きな流れが見えた。

中型台風のあと、シジミの川の上流にある貯水堰が放水のために開かれることになった。それを聞きつけた竹ちゃんは、大きな網をもつて出掛けで行き、激流に仕掛けた。大きなナマズが七〇数匹上がつた。運悪く少し下流で網を入れた人はわずか数匹だったと聞く。我が家にもおそれがあり、珍味のナマズ料理をいただいた。美味と思ったが、肉も魚も二年近く食べていい状況では比べようがなかつた。

■タニシとり 増水により家の前は、

水をかぶつた田んぼがつながつて広大な池となつていて。大人のぶかぶかの長靴を履いて歩き回り、タニシをバケツ一杯集めた。刈り取り後の田んぼは水の流れできれいに清められ、表面はビロード布のようだつた。タニシが動き回つた痕は、生乾きの土壁に線を引いたように残るので見つけやすい。タニシは煮上げると、しこしこしておいしかつた。調子に乗つて、今度エビガニを料理してみよう！と小声で切り出してみたりした。島では、イナゴ、土筆などは、食材として話題に上つたことはなかつた。恵まれた環境下、食べる必要・習慣が生れなかつたのか、なにか因習に縛られるところがあつたのか、良く知らない。誰それが沢ガニを食べたつて！こんな噂は、学内でじめの好材料になつた。一つづく、

※1 祖母にわざかな小遣いをもらひ、近所の友と連れだつて上沼田・荒川堤脇の釣具店「柿の木」を訪れ、気に入つた小物を買うのが楽しみだつた。

※2 天気予報が再開される前、終戦直後の昭和20年9月と10月には、枕崎台風と阿久根台風が相次いで襲來した。これは阿久根台風と思われる。枕崎台風では広島市内で大きな土石流が起き、死者一一〇〇名を超す大災害を出していた。